

第四十二章 チーム地球

富裕層でなくても日々平穩に暮らせる人々が地球温暖化に危機感を抱くようになった。もちろん日々生活に追われる人々も関心を持ち始める。この人々は元々節電派だ。

カーボンニュートラル思考が脱二酸化炭素運動を巻き起こす。化石エネルギーから循環可能な再生エネルギーへのシフトが加速する。その中で原子力発電所が問題となる。確かに温暖化の原因となる二酸化炭素を排出しないが、建設時に大量の二酸化炭素を排出する事故が起きれば大変なことになる。しかもテロの標的にもなる。

ウクライナ共和国にはかつて大事故を起こしたチェリノブ原子力発電所があるしヨーロッパ最大の原子力発電所もある。その原子力発電所をロシア軍が占拠して送電線を切断する。それだけではなく核攻撃すると脅迫する。これはウクライナだけでなく全世界に対する脅迫と受け取られた。さすがに友好国である中華民国もプチレンコン大統領に自制を求めた。

この核攻撃発言から世界中で核兵器廃絶の気運が高まる。核を持たない国の方が圧倒的に多いから国連総会で核兵器廃絶議案が簡単に決議される。しかし、核保有国は反対する。核兵器でお互いを威嚇したり牽制したりするのにこのときだけは結束した。結束できるのならこの議案に協調して賛成すればいいのに、そうはしない。核保有国の権力者にとって核兵器の発射ポ

タンが勲章なのだ。

核保有国はいわゆる大国である。それ故に核兵器で攻撃されると富を失う。これが現実だと言わんばかりに核保有国民も核兵器廃絶に気乗りではない。そこには富んだ者の独自の見解がある。結局国民が権力者に迎合して反対しないから問題は解決しない。

*

突然新型コロナウイルス感染が急拡大した。この敵は人間ではない。

ウイルスには生殖機能が無い。寄主を見つけては寄生して増殖する。ところが人間以外で寄主になる動物が減少した。ここ百年足らずの間に絶滅した種、絶滅危惧種……と爆発的に人口を増やした人類以外すべての動物は数を減らした。そこでウイルスはやむを得ずワクチンを開発できる強敵、人間を寄主とする。案の定壮烈な戦いが繰り広げられる。

寿命の短いウイルスはワクチンに対する耐性を身につけて危機を乗り越えようとする。緩やかな人間の対応に脳を持たないウイルスが意外に素早く対応できるのは生命体としての大先輩のなせる技なのだろう。

司令官不在のウイルスが人間を翻弄するのは人間が頭でつかちだから。しかも謙虚のかけらもないから。さらに自分が地球上で最高の地位にあると信じて疑わないエゴがある。

以前ならウイルス感染は数年経てば集団免疫を獲得した人類と共存体制に移行したので収束したものだ。

権力者は認めたらぬが経済発展とグローバル化で明らかに地球環境が激変した。気温の上昇。台風の大形化とその数の増加。集中豪雨と大洪水。熱波と森林火災。干ばつと水不足。不作……。

*

ここに資源の偏在と非効率な分配、そして資源の武器化という問題が上乘せされる。

資源はそれを持つ国に幸せをもたらすために存在するのではない。地球上のあらゆる生命体を維持するために太陽や月や火山や水など、そして生命体自身の営みの関わり合いの中で長い年月をかけて造られたものを資源と呼ぶ。

資源の代表格の鉱物すべてが存在する場所はない。つまり石油や石炭やウランや鉄鉱石やポークサイトや金や銀やレアメタルなどを一カ所で採掘できるような土地はない。石油がいやというほどあるが水がないとか、ダイヤモンドはあるが着飾る美女がいらないとか……。

猫に小判。歩く人にガソリンが要らない。自給自足できれば自動車も電化製品もパソコンもスマホも要らない。

先進国や資源豊かな国々の圧倒的な生活環境を見れば発展途上国や発展不可能国の国民には夢の夢の世界に見える。しかし、便利さというのは個人の価値観に左右される。究極の利便性を追求するのは一部の人だけで、身の丈を考えれば適当な便利さでいいという人が大多数である。

資源は元来物々交換されてきた。貨幣経済になつて交換が交易に、そして貿易になつてグローバル化されて古き良き時代の物々交換は消滅した。物々交換には人の情も交換されたがそれも消滅した。

そして経済戦争、貨幣戦争が始まり武器が金で買える時代へと進む。具体的な兵器から資源まであらゆるものが戦争に組み込まれる。まさしく戦争は資源争奪戦となる。資源の配分など見向きもされなくなった。

*

人間同士が殺し合うだけなら動物も草花も黙認するだけ。しかし、人間は防寒用だけではなくファッションとして毛皮を欲しがる。ライオンの毛皮は要らないので狩りの対象となり剥製にして武勇伝を語る。美味い動植物を優遇し不味い動植物は排除される。マグロを乱獲し森林を伐採してコーヒー園やバナナ園にする。気持ちが悪いと言うだけで駆除される動物もいる。便利な物を製造するために石炭を焚いて石油を加工する。大量の汚水を垂れ流す。空気は汚れ騒音をまき散らす。人間様のお通りだと言わんばかりのわがままを押し通す。政治家は人気取りのために環境問題に配慮しない。

地球は人間のものだと言わんばかりの行動に文句が言える生命体はいない。しかも反省しない。それどころか飽くなき利益追求に奔走する。

この宇宙を創造したのは人間が作った神ではない。もしいるとすれば原始生物から高等生物

のひとつ手前で進化をとどめた生命体全体の創意が神だと言える。創発という名の神だ。たった一つの頭でつかちな生命体はそのほかの生命体の生態系をかき回す。

*

連続した生態系の穴にできた。

生態系は生命の起源と言われる小さな小さな微生物から進化した。そして様々な生命体が暮らしている。すべての生命体と岩石や海水や空気なども含めた全員でチーム地球を形成した。

様々なプレイヤーがチームにいる。空気や水を浄化するプレイヤー。自分の子孫を残しつつ他の生命体に自らの命を提供するプレイヤー。死んで土に帰ることにより大先輩の微生物に栄養分を還元しつつ資源を形成するプレイヤー。光合成で地球環境を整える植物も立派なプレイヤー。様々なプレイヤーが複雑に絡み合う超連携プレーで有害な紫外線が地球に届くのを防いだり気温を調整したりする。どのプレイヤーも必要不可欠なメンバーである。一見補欠に見えるプレイヤーもチームに不可欠な一員だ。

しかし、唯一このチームを乱す悪役がいる。人類である。勝手に補欠メンバーを除名したり気に入らなければ抹殺したりする。自ら「監督」と称するやっかいな輩だ。

隕石の衝突や火山の爆発や地震などは人類にとっても最悪の事件だが、人類はそれに匹敵するダメージを地球に与えたことを自覚していない。たとえば東日本大震災は自然災害として歴史に残る災害だが、植物や魚類や爬虫類や鳥類などが受けた被害はしれていた。自然の復元力

の強さをまざまざと人類に見せつけた。その人類はメルトダウンを起こしたがまったく反省しないどころか原状復帰を棚上げする。

自然が原発を作ったのではない。自然を顧みない人間が作り出したものだった。確かに原子力爆弾は強烈な破壊力を持つが隕石の衝突ほどではない。しかし、地震よりメルトダウンの方が人間与えたインパクトは大きかった。目に見えないウイルスからの攻撃より放射線の方が恐ろしい。そう思ったはずだ。

十年ほどの歳月が流れると人間とは無責任なもので「喉元過男」や「過子」^{ノドモトスギオ}になつてしまう。反省を忘れ対策をなおざりにする。復興という化粧に満足するのである。

結局、人間自身が生態系に穴を開ける有害生命体と言うことになる。人間は地球の敵である。チーム地球から除名すべき生命体なのである。いい変えれば地球に取り返しつかない大きな穴を開けている。地球チームをかき乱す個人プレイヤーはやがてレッドカードを突きつけられる。

「退場！」